

## 森の民、湖へ行く

——北東マダガスカル、ベツィミサラカにおける伝統と現在——

森 山 工\*

### The Forest People Go to the Lake

—— Tradition and Actuality among the Betsimisaraka of Northeastern Madagascar ——

Takumi MORIYAMA\*

The region of Lake Alaotra, which is located at the northeastern end of the central plateau of Madagascar and inhabited by the Sihanaka, lies adjacent to tropical rain forest to its east. In this forest zone live the people called Betsimisaraka. Both the Sihanaka, who have settled around the lake, and the Betsimisaraka, who live in the forest perceive the Sihanaka as wet-rice cultivators, the Betsimisaraka as mainly swidden cultivators. However, the Betsimisaraka living in the fringe area are said to have become "Sihanakaized," and my own field research confirmed this phenomenon of "Sihanakaization."

This paper aims to clarify the real significance of "Sihanakaization" among the Betsimisaraka, bringing into focus the conceptual distinction which is made by the Betsimisaraka themselves between "customs (*fomba*)" and "life (*fiainana*)," that is, between the traditional customs and their actual way of life: they say that they remain Betsimisaraka in their traditional customs, but that they could be also called Sihanaka in as far as their way of life is concerned. In addition to ethnographic description and analysis, this paper deals with theoretical issues concerning so-called ethnicity, not from the viewpoint of the definition of ethnic categories, but from that of their use, which is essentially dependent on context.

#### I 森の中から来た人々

「タクミ、ちょっと見てごらん、おかしい人たちがやって来たよ」

その酒屋兼雑貨屋の店番を任されているジュスティーンは、店の奥でそっとわたしに耳打ちした。彼女の視線の先をたどると、40年配の成人が5人、そのうち2人は女性なのだが、と6人ほどの子供が一団となって、店に足を踏み入れるところだった。

「森の中から来た人たちだよ、あれは」なおもジュスティーンは囁き続ける。「いいかい、お

\* 東京大学大学院(文化人類学); Graduate School (Cultural Anthropology), University of Tokyo, 8-1 Komaba 3-chome, Meguro-ku, Tokyo 153, Japan

かしな人たちだからね。今に分かるよ」

今に分かる、という彼女のことばの正しさは程なく証明されることとなる。店に入った彼らは、まずはラムやビールといった酒類の立ち並んだ棚を前に、凝然と立ち尽くした。やがておもむろに男性の一人が進み出た。彼は棚の最下段、ホワイト・ラムの小瓶を指さすと、ジュスティーンヌに問いかけた。

「それ、いくらかい？」

店の中でこの一団が発した、それが唯一のことばとなったのだが、その抑揚がこの辺りのものでないことは余所者であるわたしの耳にもそれと知れる。ジュスティーンヌはといえば、彼に答えつつもわたしの方を盗み見、意味ありげな目配せを送って寄越したものだ。

男はその小瓶の代金を支払い、身振りでジュスティーンヌにコップを要求すると、その場でラムを少量つぎ入れて、まずは自分が一息に飲み下した。次いで他の男たちが、そして女たちが、果ては上は15歳から下は10歳ほどと思われる子供たちの一人一人に至るまでが、順々にラムを回し飲みした。ほどなくして瓶が空になると、彼らはもう一瓶買い入れ、それも同じように皆で黙々と干した。そして入ってきた時と同じく、全員無言のまま一団となって店を立ち去ったのだった。

マダガスカル中央高地の北東端に開けた盆地は、「シハナカ (Sihanaka)」<sup>1)</sup> と呼ばれる人々が伝統的に居住してきた地域である。盆地の北東部をマダガスカル最大の湖、アラウチャ (Alaotra) 湖が占めており、このことがこのシハナカの地を生態学的に特徴づけている。盆地内でのこの湖の位置からも分かるように、湖の北および東は湖岸間近より丘陵地となる。湖岸から10 km余りも東進すれば、そこは熱帯多雨林への入口であり、ここから始まる森林山塊はそのままマダガスカル島東海岸部へと断崖状に降りて行くのである。

さて、ここに引いた話は、このアラウチャという湖の北東岸のある町での出来事である。生粋のシハナカを以て自認するジュスティーンヌが「おかしな (hafahafa) 人たち」と形容したこの一団は、確かにその振舞いにおいて「おかし」かった。<sup>2)</sup> 祭りの日でもあるまいに、昼日中、公衆の面前も弁えずラムに手を出すなんて。それだけでも咎め立てに値するというのに、あまつさえ女や年端も行かない子供までが恥ずかしげもなくラムに口を付けるとは。しかしそれも無理からぬこと、というのが、ジュスティーンヌを初めその場に居合わせたシハナカの人々に共通の思いであったようだ。何しろ、あの人たちは森の中から来た人たちなのだから。ここでいわれている「森の中から来た人たち (olona avy anaty ala)」とは、今も触れたシハナカ

1) マダガスカル語のアルファベット表記については、以下の諸点に留意されたい。oは[u]と発音される。tr, drで表記される音は、それぞれ[t]と[d]の反り舌音である。

2) ここに「おかしな」と訳出した語、hafahafaは、「他の、異なる」を意味する語根、hafaの重複(reduplication)になるもので、「やや異なる、奇妙な、珍奇な」の意である [Abinal and Malzac 1963: 203; Rajemisa-Raolison 1985: 398; Richardson 1885: 217]。

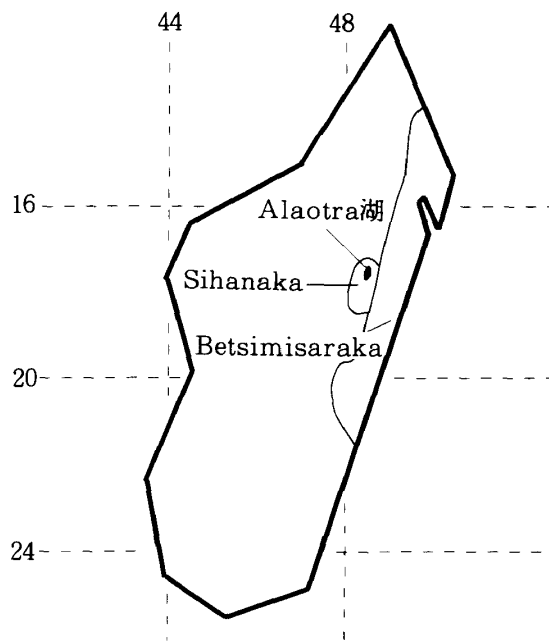


図1 シハナカの地とベツィミサラカの地

出所：[Association des Géographes de Madagascar  
1969-1971; Ramiandrasoa 1975]

の地の東に隣接する多雨林地帯に居住する人々、「ベツィミサラカ (Betsimisaraka)」と総称される人々のことである (図1 参照)。<sup>3)</sup>

わたしはすでに別所において、シハナカの人々自身の立場に即した形で、彼らの民族意識のあり方を論じた [森山 1992]。そこでは、マダガスカル国内の他地域の人々がシハナカの地に移住し、定着化して行く過程で、自らをシハナカとして同定し、かつ他からもそう同定されるに至る事実に着目し、それを「シハナカ化」として捉えた。この「シハナカ化」ということばは、前田と Rabarijoelina とが、シハナカの地の南東部での調査に基づき、その共著の論文において用いたものであり [Maeda and Rabarijoelina 1988: 168]、わたしはこのことばを引き継いだわけである。

さらに前田は、「マレー世界のなかのマダガスカル」を特集した本誌『東南アジア研究』26巻4号 (1989) において、今度はシハナカの地の北東端、ベツィミサラカの地との境界地帯における調査に基づき、「主にベツィミサラカのシハナカ化というエスニシティの漸移の問題を考えるための民族誌的事実」 [前田 1989: 417] を提示した。本論考は、わたし自身の調査に

3) ベツィミサラカとは、マダガスカル島東海岸部から北東海岸部、及びその後背地となる東部山岳地帯にかけて居住する人々の総称である。「数多く (be), 分裂することなし (tsy misaraka)」を意味するその名称は、18世紀前半、この地を政治的に統一したラマルマヌンブ (Ramaromanompo) 王が用い始めた自称詞であるが、王国としての組織は王の死後瓦解した [Grandidier, A. and Grandidier, G. 1958: 27-37]。

基づいて、そこで前田がなした議論を補完するとともに、新たな分析の方向を示すことを目的としている。

周知のごとく、マダガスカル文化は東南アジア文化を基盤とし、それにアラブ、アフリカの文化的影響を受けたものとして形成されてきた。マダガスカル文化の形成に東南アジア文化が基盤を提供していることは、マダガスカルの言語が方言差は呈しながらも全体としてオーストロネシア語族へスベロネシア語派に分類されるという事実、そして広くマダガスカルに水田ないし焼畑における稲作の伝統が見られるという事実により明確に示されている。とりわけこの後者の点は、上記の『東南アジア研究』26巻4号の諸論文が、「マレー型農耕文化」という観点から詳細な検討を試みたところでもある。地理的に見れば「東南アジア」それ自体に属するわけではないマダガスカルについて敢えてここで論ずるのも、本誌における以上のような議論の経緯を踏まえてのことであり、すでに述べたとおり、以下の論述はそこにおける前田[1989]の議論の延長上に位置づけられるべきものである。

## II ベツィミサラカとシハナカのあいだ

ジュスティーンが「おかしい人たち」と呼んだ、その好奇と軽微な侮蔑のニュアンスの当否はともかくとして、こうした語り方からも推察されるように、シハナカの立場から見れば、ベツィミサラカの人々はある際立った特異性を備えている。少なくともシハナカの有する彼らについてのステレオタイプは、自分たちとは明らかに異質なものとしてベツィミサラカを表象しているのである。

シハナカから見た場合の両者の差異は、まず第一にそれぞれの居住する地域の生態的環境の違いとして概念化されている。シハナカにとって、ベツィミサラカは「森の中に住む人々」なのであり、これに対して自身はアラウチャ湖岸に住まう者である。このことは第二に、そしてより重要なことに、両者の生業形態の違いの概念化に結び付く。すなわち、シハナカの側から見ると、自分たちが湖の周辺の沼沢地を中心に水田稲作農耕を営むのに対して、ベツィミサラカは森の中で焼畑農耕を行なう人々なのである。

わたしが主たる調査地としていたのはシハナカの地であり、こことベツィミサラカの地との境界地帯をも含めて、多雨林の中のベツィミサラカの地に滞在したのは、合計して2週間にも満たない期間であった(図2参照)。<sup>4)</sup>したがってそこでのわたしの調査はきわめて限られたものだったが、それでもこの間の聞き取りから、ベツィミサラカの人々もシハナカについて

4) 本論考の元となったサーベイは、アラウチャ盆地の北東部、さらにその東の多雨林地帯において、1989年1月から2月、及び1991年6月に、数度にわたって断続的に行なわれたものである。調査はマダガスカル語中部方言群シハナカ方言によってなされた。

森山：森の民、湖へ行く

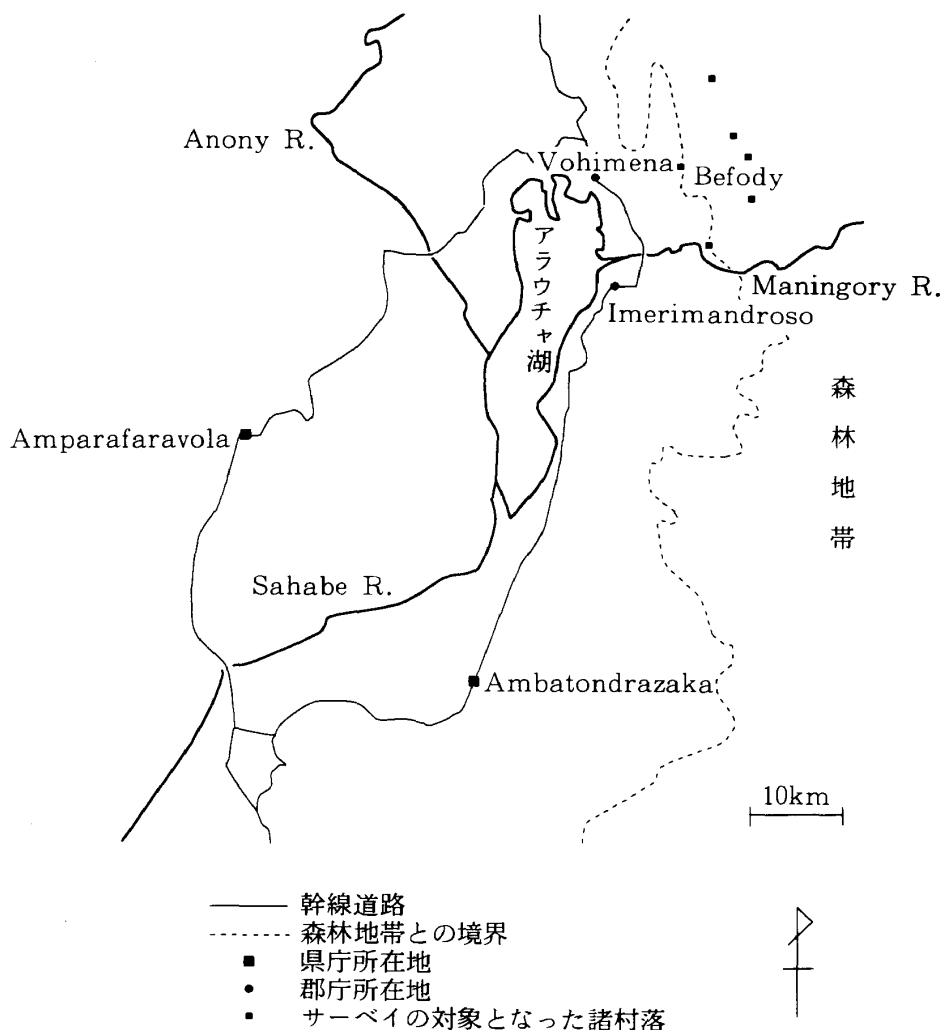


図2 アラウチャ湖周辺概略図

出所：[Foiben-Taosarintanin'i Madagasikara発行 1:500,000地図, 1986に基づいて作成]

同様のステレオタイプを有していることが明らかとなる。つまりベツィミサラカの立場から見た場合も、森に住まい焼畑を営む自分たちに対して、シハナカはアラウチャ湖の周辺に住み水田耕作を行なう人々として概念化されているわけである。

さらに、シハナカとベツィミサラカとが相互に持ち合っている以上の概念図式は単なるステレオタイプであるにとどまらず、それぞれの生業形態の実際ともかなり正確に対応している。シハナカの地から北東の丘陵地へ赴くと、前田 [1989] が記述の対象としたベフディ (Befody) という村落に行き当たる。ここを境として、その東は多雨林地帯に入るのだが (図2参照)、この村落以東、植生の変化とともに、農耕をめぐる景観の変化はまず第一に目を引くものである。詳細は前田 [同上: 423-426] の記述に譲るが、ここにおいて水田耕作地帯から焼畑耕作地帯への景観の変化は劇的であり、それは耕地の準備、播種、収穫、耕地での稲積

みや脱穀といった農作業の仕方そのものの変化にとどまらず、村落内での稲の貯蔵方法や稲作儀礼の行なわれ方の変化にまで及んでいる。<sup>5)</sup> シハナカの地の南東部の村落、ヴァンドゥザナ (Vandrozana) と比較して、前田も次のように論じている。

ヴァンドゥザナはシハナカだと主張し、ベフディはベツィミサラカであると言うが、両者の違いは焼畑 (tavy) をしているかしていないか、焼畑儀礼があるか無いか、その違いが集約されると言っても良い程、その他の違いは少ない。事実、彼ら自身も焼畑をしているのがベツィミサラカという理解をしているようである。[同上: 428]

しかしながら、「水田耕作民・対・焼畑耕作民」としてシハナカとベツィミサラカとが相互に概念的に差異づけ合っており、かつ実際にもおおむねこの図式の通りであるとするならば、前田が主張する「ベツィミサラカのシハナカ化というエスニシティの漸移」は、一体いかなる形で現象しているのか、という疑問が浮かぶ。それは、ベフディのような両者の境界地帯において、元来ベツィミサラカと称していた人々が焼畑耕作から水田耕作へと生業形態を転換させつつある過程なのだろうか。それとも、境界地帯においてはシハナカとベツィミサラカとが混ざり合っただけで、そこでの民族意識が曖昧になりつつある過程なのだろうか。「ベツィミサラカのシハナカ化」を問題とする以上、それがいかなる点で「シハナカ化」を遂げており、または遂げつつあるのかを明確にすることは、不可欠の手続きであるはずである。

この点についての前田の議論は一見して明快である。ベフディに関するその記述によると、この村落は、南部ベツィミサラカ、北部ベツィミサラカ、シハナカといった多様な出身の人々がこの地に移住し、互いに頻繁な通婚関係を持ち合った結果、現在の村落構成となるに至ったものである [同上: 421-423]。自身ベフディ生まれという30歳台以下の層を別にすれば、その上の世代については育ちはベフディだが生まれは別という者が多くなり、しかも「ベフディに移住する前の地域は湖岸のシハナカ地方と東のベツィミサラカ地域とがまざっている」 [同上: 422] のである。したがって、

5) ベツィミサラカの焼畑耕作において、収穫し、稲積みにした後の稲を保存するために焼畑に設けられる小屋、trano omby に対して、前田は「牛小屋」という訳義を当てている [前田 1989: 425]。しかしわたしの聞き取りによれば、trano (「家屋、小屋」) はよいとして、この場合の omby は「牛」の意ではなく、「十分な、満たしうる」を意味するその同音異義語である。ちなみに、この後者の意の omby から派生する名詞、fahombiazana は、「よき収穫 (成果)、成功、完璧」を意味する [Abinal and Malzac 1963: 463; Rajemisa-Raolison 1985: 197, 780; Richardson 1885: 461]。

このように見てくると、単に親の世代だけを問題にしても、人の移動と血の混合とがひんばんに行われていて、単純にベツィミサラカ、シハナカと割り切れないことが明確になる。[同上：423]

そうであるならば、元来ベツィミサラカであった人々が焼畑耕作から水田耕作へと生業形態を転換させつつある過程として「ベツィミサラカのシハナカ化」を把握することは、議論の短絡でしかないであろう。「元来ベツィミサラカであった人々」などという範疇でこの村落の住民を単純に分類すること自体が、すでに困難なはずだからである。

実際、ベフディの農業についての前田の記述を見ると、シハナカ系の住民が水田耕作に専念し、ベツィミサラカ系の住民が焼畑耕作に専念しているといった単純な分類そのものが成り立たないことが推察される。前田の世帯調査によれば [同上：424]、1986年当時、24世帯中18世帯が水田耕作を行っており、また20世帯が焼畑を行なっている。しかも焼畑を実施していない4世帯のうち、焼畑自体を持っていないのは、外来者である小学校教員の世帯と、80歳の老婆単身世帯の2世帯のみである。こうした数字から推測する限り、各世帯についてそれがシハナカ系かベツィミサラカ系かをよしんば弁別しえたとしても、そのどちらの世帯ともが、水田耕作と焼畑耕作の双方に従事している可能性が高いと思われる。「現実には、ベツィミサラカよりシハナカが水田をより強く欲しがらる」 [同上：423] 傾向があるとはされるものの、以上のわたしの推察が正しいとするならば、水田耕作民か焼畑耕作民かに基づいて住民を分類することに意味を見出すことはできない。したがって、このように解する限り、前田のいわゆる「エスニシティの漸移」は、ひとえにシハナカとベツィミサラカとの間での人的移動と混交の結果であると見なされねばならないことになるのである。

### Ⅲ ベツィミサラカ化とシハナカ化のあいだ

しかしながら、前田の記述を以上のように理解した上で、一つの疑問が生ずる。シハナカの地とベツィミサラカの地との境界地帯における人的移動と頻繁な通婚関係の結果として「エスニシティの漸移」という事実が生じているとするならば、なぜそれが「ベツィミサラカのシハナカ化」という形を取らなければならないのだろうか。いいかえるならば、なぜそれが「シハナカのベツィミサラカ化」であってはならないのだろうか。あるいはなぜそれが、シハナカ・ベツィミサラカの双方に対等な形で、互いの民族意識の不明確化であってはならないのだろうか。

しかも、前田に基づいた前節での記述と推測にもかかわらず、ベフディでのわたしの聞き取りによる限り、彼らは自身の村落をベツィミサラカの村落であると一義的に同定している。前

田の世帯調査の結果を見ても、実はベツィミサラカに出自を持つとされる人の方が、シハナカに出自を持つとされる人に対して圧倒的に多いのが実状である [同上: 422-423]。すでに引用したように、前田自身「ベフディはベツィミサラカであると言う」 [同上: 428] と述べてもいるのだ。そうであるならば、人的移動と混交の結果として招来されたものは、むしろ逆に「シハナカ系移民のベツィミサラカ化」ではなかったのだろうか。つまり、シハナカ系移民の方が数に勝るベツィミサラカに同化し、今や自身ベツィミサラカを名乗るに至っているのではないだろうか。それにもかかわらず、「ベツィミサラカのシハナカ化」を問題とすることに何らかの意義があるのだろうか。

このことを見きわめるためには、境界地帯それ自体、あるいは境界地帯に位置する一村落にのみ目を止めていたのでは不十分である。前田の論点とは裏腹に、ベフディという村落の微視的な世帯調査の観点のみからは、「シハナカ系移民のベツィミサラカ化」が生じていると記述しうる可能性、あくまでも可能性にとどまるが、を否定し切れないのだ。むしろここでは分析の視点を引き、境界地帯をあいだに挟んでの多雨林地帯（ベツィミサラカの地）とアラウチャ湖岸（シハナカの地）との対立という、より大きな関係の枠組みの中に議論を位置づける必要がある。そこで以上の前田の記述を踏まえつつ、以降はわたし自身の調査に基づいて論述をつなげたい。

結論から先にいえば、シハナカとベツィミサラカとのあいだでの「エスニシティの漸移」は「ベツィミサラカのシハナカ化」という形態を取っており、それ以外ではない。その根拠は次のような事実のうちにある。

境界地帯のベフディにおいても、さらに東進して完全に多雨林地帯に位置する諸村落においても、そこに住む人々の民族意識を問うために、「あなた方の〈民族 (foko)〉は何ですか」という問い方をすると、常に「われわれはベツィミサラカだ」という答えを得る。この問いで使われる foko という語は、辞書において「部族、カースト、家族、党派、集団、階級」 [Abinal and Malzac 1963: 181]、「現れ出たる出どころ；出どころを同じくする人々の集まり」 [Rajemisa-Raolison 1985: 380]、「家族、階級、クラン」 [Richardson 1885: 198] などと定義される語彙であるが、シハナカ方言、ベツィミサラカ方言においては「民族」にほぼ相当する語として用いられる。注目すべきことに、問答のこの段階においては「われわれはシハナカだ」という語りは決して出てこない。そこで、「ではあなた方はシハナカではないのですか」とさらに問いかけると、その時点で初めて、「いや、われわれはシハナカにも入るのだ」とか「ベツィミサラカとシハナカとの両方に入るのだ」といった答えが返ってくる。また、質問の仕方を変えて、「あなた方はベツィミサラカですか、シハナカですか」と最初から問うと、今度はそれに対する直接の回答として、「われわれはベツィミサラカではあるけれども、シハナカにも入るのだ」という答えを得るのである。



#### 森山：森の民，湖へ行く

以上の経緯からして、彼らの民族意識がまず以てベツィミサラカとしてのそれであることは疑いえない。問答の過程で彼らがシハナカを名乗ることがあるとしても、それはベツィミサラカとしての名乗りを前提とした上でのことである。逆に、彼らが「われわれはシハナカである」といいきったり、「われわれはシハナカではあるけれども、ベツィミサラカにも入るのだ」と答えることは皆無なのだ。この事実を目を止める限り、「エスニシティの漸移」の現象も、「ベツィミサラカのシハナカ化」、すなわち「ベツィミサラカを前提とした上でのシハナカ化」として捉えねばならず、「シハナカのベツィミサラカ化」としては捉えられないことになるわけである。

では、ベフディのような境界地帯をも含めて、なぜ多雨林地帯のベツィミサラカがシハナカ化し、アラウチャ湖岸のシハナカはベツィミサラカ化しないのだろうか。実際、境界地帯の西、自他ともにシハナカと認める人々において、彼らが「ベツィミサラカ化」しているらしいことを示唆するような民族誌的事実は存在しない。これに対して、境界地帯の東、完全に多雨林地帯の中に位置する諸村落においては、焼畑農耕に生業の基盤を置き、本来的なベツィミサラカであるはずの人々でさえもが、その「シハナカ化」を窺わせるべき上記のような語り方をするのだ。これらを考え併せるならば、ベツィミサラカ化とシハナカ化とのあいだに存するこのような非対称性は、当然問題とされなければならない。ベツィミサラカのシハナカ化だけを論じていて済むことではないのである。

#### IV 森の民，湖へ行く

なぜベツィミサラカの方がシハナカ化して、その逆ではないのか、というこの問題を扱うに先立って、そもそもベツィミサラカがシハナカ化するとき、それがいかなる点での「シハナカ化」であるのかを押さえておく必要がある。というのも、前田が論じた位相とは異なる位相での「シハナカ化」のあり方を見ることができるからである。

試みに、シハナカの地とベツィミサラカの地との境界地帯において、また多雨林の中のベツィミサラカの地において、「われわれはベツィミサラカではあるけれども、シハナカにも入るのだ」といった答えが得られた時点で、ではそれは一体いかなることかとさらなる説明を求めてみる。するとわたしの聞き取りによる限り、一様に次のような答えを得ることになる。「われわれは〈慣習 (fomba)〉の点ではベツィミサラカであるが、〈生活 (fiainana)〉の点でシハナカでもあるのだ」と。

fombaとは、「付き従うこと、ともに行くこと」[Abinal and Malzac 1963: 461; Rajemisa-Raolison 1985: 779; Richardson 1885: 459]を意味する語根、ombaより派生する語で、「従われるもの、従われる様態」を原義とし、広く「なされ方、あり方」を意味するが、マダガス

カル語諸方言においてはとりわけ「慣習」を意味する。上に引いた語りにおける fomba が「慣習」の意であることは、語り手によっては「祖先」を意味する語、razana によってこの語を限定し、「祖先伝来のなされ方 (fomban-drazana)」すなわち「伝統的慣習」としてこれを語るということからも明らかである。

他方ここでわたしが「生活」として訳出した語、fiainana は、「命、生命」[Abinal and Malzac 1963: 10; Rajemisa-Raolison 1985: 38; Richardson 1885: 12] を意味する語根、aina より派生し、広くは「生きること」一般を、狭くは「生活、人生」を意味するものである。上に引いた語りにおけるこの語も、語り手によっては「現在における生活 (fiainana amin'izao fotoana izao)」として、より限定的に用いられている。

したがって、「シハナカ化しつつあるベツィミサラカ」にとって、何が「ベツィミサラカの」であり、何が「シハナカの」であるのかについては、次のようにまとめることができる。彼らはその「伝統的慣習」においてベツィミサラカであり、その民族意識もまず以てベツィミサラカとしてのそれであるのだが、他方「現在の生活」においてはシハナカとして自ら名乗りつつもあるのである、と。しかしながらこのことは、ベツィミサラカの「伝統的慣習」が「現在」に至って「シハナカの」に変容を遂げつつあるということの意味しているわけではない。

すべては、彼らが「現在の生活」と語るものの内容に掛かっている。すでに述べたように、焼畑耕作と同時に水田耕作もかなりの規模で行なっているベフディのような境界地帯の村落は別として、多雨林地帯に入ると焼畑の占める割合が圧倒的に大きくなる。こうした多雨林のただ中の諸村落においては、生業様式のみならず、方言や諸々の社会制度も含めて、彼ら自身未だにベツィミサラカの「伝統的慣習」に基づいて村落生活を営んでいると見なしている。つまり、彼らの説明による限り、従来の村落生活のレベルにおける彼らの「伝統的慣習」は取り立てて変容しているわけではないのである。しかしそうであるならば、「伝統的慣習」と対置されて語られるこの「現在の生活」とは、一体何を指示しているのだろうか。

以下に粗描するように、現代の国家の行政的な枠組みによって課される制約や、市場経済への編入といった点で、「現在の生活」における彼らは「伝統的慣習」の場である村落の範囲を大きく越えて活動することを強いられたり、そうすることを自ら選んでいる。彼らの語る「現在の生活」なるものの実態は、従来の村落生活のレベルを越えた社会生活の諸側面で、彼らの活動がいかに営まれているのかにかかわっている。そこにおいて彼らは、絶えずアラウチャ湖の沿岸地域を指向しているのだ。

まず、この地域の行政的な位置づけの問題がある（本節での以下の記述については、前掲の図2を参照されたい）。わたしがこの地域を最後に訪れた1991年6月当時までの行政区分の上からいえば、この地はアラウチャ湖の北東の沿岸に郡庁所在地を持つヴヒメナ (Vohimena) 郡に属し、さらにこの郡はアラウチャ湖の西岸に県庁所在地を持つアンパラファラヴラ

## 森山：森の民，湖へ行く

(Amparafaravola) 県に属している。すなわち、「森に住まう人々」である彼らも、行政的にはアラウチャ湖岸に中心を置く行政区画の周縁部として、そこに組み込まれているわけである。

このことは彼らに、好むと好まざるとにかかわらず、従来の村落生活のレベルを越えた社会生活の様々な側面において、アラウチャ湖岸に赴くことを強いることになる。たとえば婚姻に際して、それを「伝統的慣習」に則ったものとしてのみならず公的にも成立させようとするならば、郡庁にまで赴いて登録手続きを行なうことが不可欠である。子供の教育についても、初等教育であれば村内ないしは近隣の村落において受けさせることができるが、中等教育となると郡庁所在地にまで子供を出すことが必要となる。また当然のことながら、公の選挙における選挙権者・被選挙権者としての彼らも、これらの郡や県の管理下に置かれることとなる。

こうした行政的な枠づけにもまして、彼らの日常生活に密接にかかわるのが、経済活動の側面である。ヴヒメナ郡の南に隣接するのは、イメリマンドゥス (Imerimandroso) 郡である。アラウチャ湖の北東岸に位置するその郡庁所在地は、北東岸地域全体の経済の中心地の位置を占めている。<sup>6)</sup> この町で週2回開かれる定期市は、とりわけ5月前後の収穫期から次の農繁期が始まる11月前後までの期間、この地域全体における最大の集散地となる。また医療の面においても、小さな村々の雑貨商が抗マラリヤ薬やアスピリンといった常備薬を扱うのとは格を異にして、この町には公式の認可を受けた薬屋が一軒あり、医師も常駐している。

ベフディからこのイメリマンドゥスまでは片道約25kmの道のりであるが、ベフディのさらに東の多雨林地帯からでさえ、イメリマンドゥスへ徒歩で赴くことはまれではない。たとえば、あるベフディの人によると、明らかにマラリヤ (tazo) であると自分たちで診断がつくような病気の場合には、手近で薬を手に入れたり、近くの医者や助産婦の元に行くが、そうでない場合にはいづれ薬を探す手間を考えざるをえない。そうなると、たとえ医者や助産婦がいて病名の診断はつくとしても、薬の探しようのないヴヒメナなどの地点は飛び越して、正式な薬屋の存在するイメリマンドゥスに直接に赴くそうである。またベフディをも含めて、ヴヒメナ郡内の多雨林地帯の村々については、イメリマンドゥスに常駐する医師がほぼ3カ月毎の巡回視察を請け負っており、医療面での彼らとイメリマンドゥスとの心理的距離はそれほど遠くはない。

さらにイメリマンドゥスは、彼らにとっての主要な買い出し先である。ベフディの東、多雨林地帯のある村落には一軒の雑貨屋があるが、その商品の仕入れ先はイメリマンドゥスの定期市である。その雑貨商によると、村からは片道約30kmの道程を、未明に村を出、5時間余りを

6) ただし、同郡はアラウチャ盆地の南東に県庁所在地を持つアンバトゥンドラザカ (Ambatondrazaka) 県に属している。

かけてイメリマンドゥスまで歩くと、仕入れを済ませて取って返し、日暮れには村に帰り着く。また収穫期を迎えて小金を得た人々にとって、イメリマンドゥスの定期市は恰好の気散じの場ともなる。市に出てきた彼らはこの時とばかり町の酒屋でラムなどを買い飲みしては、冒頭のエピソードにあったように、「森の中から来たおかしな人々」をシハナカに対して印象づけるわけである。

以上列記した諸点が、ベツィミサラカをまず以て名乗るこれらの人々にとっての「現在の生活」の内容であり、「われわれはベツィミサラカではあるが、〈生活 (fiainana)〉の点ではシハナカにも入るのだ」と彼らが語るとき含意されていたことである。このように見れば、なぜ多雨林地帯のベツィミサラカがシハナカ化し、逆にアラウチャ湖岸のシハナカはベツィミサラカ化しないのかという問い、つまりベツィミサラカ化とシハナカ化とのあいだの非対称性に関する問いも氷解する。単純なことながら、アラウチャ湖岸のシハナカがベツィミサラカ化しないのは、森の中のベツィミサラカがその「現在の生活」においてアラウチャ湖の沿岸地域に依存し、そこの頻繁な往来を保っているのとは反対に、シハナカの側としては森の中にまで足繁く通うだけの行政的な必要も、経済的な動機も関心もないからなのだ。

ヴヒメナ郡やイメリマンドゥス郡の行政的な東限を越えて、さらに東の多雨林に居住するベツィミサラカにおいても「エスニシティの漸移」の現象が見られるのかどうかについてわたしは資料を持たず、したがって以上のわたしの議論には留保を付けざるをえない。しかしその上で、わたしが知りえた限りのベツィミサラカの人々についていえば、彼らにおけるシハナカ化の意味は、従来の村落生活のレベルを越えた現今の社会生活の様々な側面で、彼らがアラウチャ湖沿岸のシハナカの地を指向し、また指向せざるをえないということにあったのである。

## V 民族の名の定義と使用

以上において論述してきたベツィミサラカの「シハナカ化」は、わたしが別所 [森山 1992] において論じた、シハナカの地への移入民の「シハナカ化」と同じ意義を持つものではない。シハナカの地へ移住してきた国内他地域の人々の場合、彼らが自らシハナカを名乗り始める過程は、シハナカの地へのその定着化の過程と切り離して捉えることはできず、さらにこの定着化において最も重要な意味を担う出来事は、彼らが現住のシハナカの地に墓を建てることによって、元々の出身地であった「祖地 (tanindrazana)」との紐帯を最終的に断ち切ることである [森山 1992: 134-139]。これに対して、ここで論じたベツィミサラカのシハナカ化の場合、シハナカの地との頻繁な往来の事実はあるにしても、そこにはシハナカの地への移住と定着の過程は全く関与していない。いいかえると、シハナカの地への移入民のシハナカ化は、彼らがこの地に定着し、この地こそを自分の「祖地」として再定義することで、自己のあり方そ

のものをも「シハナカ」として再定義するに至る過程である。他方ベツィミサラカのシハナカ化は、彼ら自身が語る場所の「現在の生活」の点においてのものであり、そしてその限りにおいてのものであって、この意味で限定付きのシハナカ化でしかないのである。

この二つの「シハナカ化」の相違は、在来のシハナカの人々がこれら二種の人々に対してとる態度の差としても現われる。シハナカの地への移入民の場合、彼らが自らシハナカとして名乗る名乗りは、彼らがこの地で世代を経て定着化して行くのに応じて周囲の在来のシハナカによる名指しの追認を受けている。つまり彼らは単に自らをシハナカとして同定するのみならず、周囲からもシハナカとして同定されているのである。これに対して、いかにベツィミサラカ自身が「自分たちはベツィミサラカではあるが、シハナカにも入るのだ」と語ろうとも、湖岸のシハナカが彼らをそのように認めることはない。シハナカにとってみれば、彼らは依然ベツィミサラカ以外ではありえないのだ。何しろ、あの人たちは森の中から来るおかしな人たちなのだから。<sup>7)</sup>

問題はそれゆえ、ベツィミサラカの人々が「シハナカ」という名称を用いて自らを同定するその仕方にある。すでに触れたように、「ベツィミサラカ」という名と「シハナカ」という名が対立させられる際に、ベツィミサラカとシハナカの双方に概念化されていたことは、「焼畑耕作民（ベツィミサラカ）・対・水田耕作民（シハナカ）」という対立であった。しかし、ベツィミサラカの人々が「自分たちはベツィミサラカではあるが、シハナカにも入るのだ」と語る場合はどうであったろうか。この場合は、「焼畑耕作民・対・水田耕作民」という対立はもはや問題とならず、「伝統的慣習・対・現在の生活」という対立にその焦点がすり替わっている。ベツィミサラカのシハナカ化の実態は、この「ベツィミサラカ・対・シハナカ」という一対の範疇についての、その対立のさせ方の変化にある。シハナカが未だに彼らをベツィミサラカとしてしか同定しないのは、シハナカの方がこの対立のさせ方の変化を共有していないからである。シハナカの側からした場合の両者の対比は、依然として「水田耕作民・対・焼畑耕作民」という対立以外ではないのだ。

ベツィミサラカの人々は、このように新たな対立の枠組みにおいて「ベツィミサラカ」および「シハナカ」という名称を使用するに至っており、この変化は、行政機構への彼らの組み込みや市場経済への編入といった、「現在の生活」における彼らの環境の変化に起因している。このことは、客観的に記述しうる生活環境の変化に応じて、この二つの名称を用いつつベツィミサラカが行なう世界の概念的な切り取り方に変化が生じたことを意味している。それゆえ、名称のこうした新たな用法において端的に示されているものは、「ベツィミサラカ」と「シハ

7) すでに注記したように（前出脚注2），ここでの「おかしな（hafahafa）」という語の語根，hafaが、「他の，異なる」を意味していたことを想起されたい。

ナカ」という一対の範疇についての、ベツィミサラカの側からなる新たな理解の仕方である。彼らのシハナカ化は、生活環境の変化にともなって、「ベツィミサラカ」および「シハナカ」という民族範疇に対する彼らの側からの理解の枠組みが変化することに存したのである。

いわゆる「エスニシティ」を巡る議論は、「民族」なる概念そのものの定義の問題を別にしても、こと民族範疇に関する限り、もっぱらある特定の民族範疇の定義という形でこれまで論じられてきた。単純化していえば、それは「何々族とは、あるいは何々人とは何か（誰か）」という形式の問いを論述の出発点において提起した上で、その人々をそれたらしめるべき一般的に妥当する共通属性を抽出し、それによって「何々族は、あるいは何々人は何で（誰で）あるのか」を規定しようとする議論である。

しかしながら、わたしが別所で論じたように〔森山 1992: 123-125〕、それがもし人類学者や民族誌家の側からの「客観的定義」としてなされるとするならば、そこには何を以て「民族」とするかについての人類学者・民族誌家の予めの判断が滑り込まざるをえず、その議論は論点先取に陥らざるをえない。<sup>8)</sup> これに対して、現在の「エスニシティ」論の趨勢は、当事者自身が自らの民族範疇に対して施す「主観的定義」に重点を置く方向にある。そこで以下では、この立場を民族の名の「定義論」として扱うことにしよう。

当事者自身の施す「主観的定義」に注目するこの「定義論」は、「客観的定義」の議論が論点先取に陥ることと比較すると、それ自体において何がしかの論理的困難を含んでいるわけではない。もし仮に「定義論」が過つとするならば、それは定義にとらわれるあまり、定義を離れては民族範疇を扱えなくなるというその姿勢の膠着化においてである。それは「定義論」そのものの誤りであるというよりも、その適用における誤りである。

もちろん当事者自身が、自らの民族範疇について自覚的に定義づけを行ない、その民族としてのアイデンティティを反省的に捉え返そうとする集合的意志を持つことはまれではない。実際、諸々の「民族問題」にあってはこのことが絶えず顕在化する。たとえば現代のイスラエルにおいて、「ユダヤ人定義問題」が深刻な国家的課題となってきたことを想起しよう。そこで問題化しているのは、ユダヤ人自身によるユダヤ人の法的規定である。法的規定である以上、その定義づけは、文脈に依存することなく普遍的に妥当する共通属性の規定を目指すものである。<sup>9)</sup>

このように当事者が自らの民族範疇の一義的な定義を問題とする場合、「定義論」の枠組みで事態を論述することには何らの支障もないだろう。しかし自らを定義づけようとする集合的

8) この点については、名和 [1992: 299] にも同様の指摘がある。

9) 「ユダヤ人とはだれか? というユダヤ人定義問題は、イスラエルにおいて深刻な政治的争点となっている」〔板垣 1992: 23〕。1958年以來、その法的規定の問題は、政府、裁判所、ユダヤ教会を巻き込んで再三論議された。「結局、こんにちイスラエルでは、ユダヤ人の法的規定は〈ユダヤ人を母とする者またはユダヤ教徒〉ということになっている」〔板垣 1992: 24〕。

意志が、「民族問題」の渦中においてのような、当の人々にとって危機的な状況においてこそ典型的に現われることにも注意せねばならない。こうした状況の一方で、自身の民族範疇の定義づけそれ自体が、単に問題にすらならない場合があるのである。

このことは、民族範疇の定義が当事者にとってすでに明確で曖昧さのないものであるということの意味するわけではない。むしろ逆に、当事者たちに民族範疇の定義を求めてみても、彼ら自身はそれを曖昧さなく規定することはできない。それにもかかわらず、あるいはそれだからこそ、自己を規定しようとするそのことが端的に自明の問題の場を構成することがない、そういう場合である。

そうした場合の例として、ここで一旦「ベツィミサラカ」を離れ、わたしがよりよく知る「シハナカ」に焦点を当ててみよう。わたしが別所に詳述したように [森山 1992]，シハナカの人々に対して「シハナカをシハナカたらしめる所以は何ですか」と問い、彼ら自身からなる民族範疇の定義を求めてみても、彼らは困惑に囚われるばかりで何らの積極的な規定もなしえない。しかも、この民族範疇の定義を求めて彼らが日常的に議論するような場さえ（民族誌家の執拗な問いかけを受けた場合は別として）、彼らのうちには成立していない。この場合にあくまでも「定義論」の枠組みで論述しようとするならば、それは範疇の一義的な規定にのみ拘泥する膠着した姿勢の謗りを免れることはできないだろう。

しかしながら、シハナカが自身の民族範疇について明確な定義を述べえないということは、彼らがこの範疇を理解していないということの意味するものではない。ある概念範疇について、その曖昧さのない「定義」を述べうるということと、その概念範疇を「理解」しているということとは、別の次元のことである。概念の理解とは、その概念を明確に定義できるということのうちにはではなく、その概念を具体的な諸々の語りの中で使用できるということ、そしてその概念の誤用の際には、それが誤用であることを指摘できるということ、こうしたことのうちには単にそれとして示されているものなのだ。

それゆえ、たとえシハナカを名乗る人々が「シハナカ」という範疇それ自体に対して一般的に妥当する明確な定義を施しえないとしても、この語に対する彼らの理解は、彼らがこの語を使用する具体的な語りのうちに示されていることになる。この場合、民族誌家にできることは、範疇の一義的な定義に固執することではなく、範疇の使用のされ方とその文脈を記述し、それによって彼らの概念理解の枠組みを示すことでしかないはずだ。それはたとえば、「ベツィミサラカ」という範疇との対比が問題化する文脈においては、シハナカの人々が「水田耕作民・対・焼畑耕作民」の対立としてこれを語るということである。あるいはそれは、この地に墓を建て、定着化した移民が自らシハナカを名乗るということであり、かつ在来のシハナカも彼らをそう名指すということである。さらにはそれは、「現在の生活」の点で今やシハナカをも名乗るベツィミサラカについてはシハナカがその名乗りを追認せず、相変わらず「森の中

のおかしな人々」と語るということである。<sup>10)</sup>

もちろん、「シハナカ」という民族範疇の定義が明確なものではないということは、彼ら自身が外界の対象をシハナカと非シハナカとに区分する上で、境界事例とも呼ぶべき中間領域を生まずにはおかない。つまり、一方でシハナカであることが明確な人々がおり、他方でシハナカでないことが明確な人々がいるとしても、その両極間にあって、シハナカであるか否かに曖昧さを残す人々を生まざるをえない。たとえば、シハナカの地への移入民は、シハナカの地へのその定着化の度合いに応じて、これら両極のあいだの境界事例を呈することになる。元々の出身地との紐帯を断ってこの地へ墓を築いた始祖から4世代を経て、今や自他ともにシハナカと認める人々であってさえ、文脈によっては「外来のシハナカ (Sihanaka mpihavy)」などと自称したり、他からそう言及されることが依然としてあるほどなのである。

同様の境界事例は、前節で触れたシハナカ化しつつあるベツィミサラカについても部分的に当てはまる。すでに述べたように、ベフディおよびその東の多雨林地帯において人々の「民族 (foko)」を問うと、彼らはまず「ベツィミサラカ」を名乗るのだった。それゆえ、たとえ「現在の生活」の点で彼らが「シハナカ」を名乗るにしても、まず以ての彼らの名乗りには曖昧さも混乱もない。またシハナカの側から見れば、彼らはあらゆる点でベツィミサラカ以外ではありえず、やはりその同定には混乱はない。

ところが、ベフディの南10 km、やはり多雨林への入り口に当たり、シハナカの地とベツィミサラカの地との境界地帯に位置する村落においては、彼ら自身の名乗り方も曖昧となり、彼らに対する湖岸のシハナカの人々の名指し方も曖昧となる。このことは、この村がベフディ以上にイメリマンドゥスに近く（片道およそ15 kmの道程）、その結果この町により強く依存し、そことより頻繁な往来を保っていることと無関係ではない。実際、彼らはイメリマンドゥスの定期市に買い出しに赴くだけでなく、収穫期においては収穫物を売りにも出る。さらに農繁期に入って家内の現金が乏しくなり始める頃には、この定期市は近くのマニングリ (Maningory) 川（前掲図2参照）で採れるウナギの販売先ともなり、現金収入の獲得の場となる。その彼らにベツィミサラカかシハナカかを問うても、彼ら自身明確な規定を回避しようとする。ある初老の男性などは、「ベツィミサラカ」という名称と「シハナカ」という名称とを組

10) シハナカの地へ墓を建てて定着化した移入民がシハナカを自称し、他称もされるということは、「シハナカとはこの地に墓を有する者である」という「定義」を示すものとも思われよう。しかしながら問題は、在来のシハナカであれ、シハナカ化した移入民であれ、彼らにシハナカという概念の規定を要請した際に、彼ら自身がこのような形で明確な規定を施しえないことにある。とりわけ在来のシハナカについては、この地に墓を有することがあまりに自明であるため、このことが改めて意識化されることはない。この地に墓を持つことが彼らによって言及されるのは、定着化した移入民の存在が問題となる文脈において、彼らのシハナカとしての名乗りや名指しを正当化する場合のみである。したがってこれは概念の一義的な定義の問題ではなく、文脈に依存したその使用の問題である。



み合わせて、苦し紛れに、しかし多分に冗談混じりに、「われわれはいつてみれば〈ベツィミハナカ (Betsimihanaka)〉といったところさ」と答えたものである。<sup>11)</sup>

しかし、ある概念によって名指すことができるか否かについて曖昧さを残す境界事例が存在するということも、決して当の概念が理解されていないということの意味するものではない。すでに述べたように、概念の理解は文脈に依存しないその一義的な定義づけにではなく、特定の文脈におけるその使用のうちに示されている。ある概念について特定の事例が境界事例であることが分かるということは、その概念を具体的な文脈の中で正しく使用できるということや、その誤用を指摘できるということと同じく、むしろその概念についての理解の枠組みを示すものなのだ。<sup>12)</sup>

したがってある種の人々が、自分がベツィミサラカであるかシハナカであるかについて自ら曖昧さを覚え、「ベツィミハナカ」という造語で民族誌家の問いをはぐらかすとしても、その人々が「ベツィミサラカ」や「シハナカ」という語を理解していないことになるわけではない。わたしは何も、ベツィミサラカとシハナカとのあいだでの「エスニシティの漸移」の結果、「ベツィミハナカ」という新たな「民族」が生まれつつあると主張しているのではない。この語りは、民族誌家の質問に飽いた冗談好きな一人の男性の、おそらくはその場限りの語りでしかない。しかし、こうした語りによって自己規定を回避するということが、「ベツィミサラカ」および「シハナカ」という名称に対するこの男性の理解を示しているのである。

以上に論述したことは、先にわたしが民族の名の「定義論」としてまとめたものとの対比でいえば、民族の名の「運用論」として要約されよう。すでに述べたように、本論考が問題としたベツィミサラカのシハナカ化の実態は、現在におけるその生活圏の拡大にともなって、ベツィミサラカの人々が「ベツィミサラカ」という名、および「シハナカ」という名を新たな理解の枠組みで用い出したことにある。ここに示されているのは、「ベツィミサラカ」という範疇それ自体の定義でも、「シハナカ」という範疇それ自体の定義でもない。示されているものは、この両範疇を対立の対として語る新たな文脈と、そこにおける新たな対立のさせ方である。それは、範疇それ自体の一義的な定義づけが端的に問題化しない次元での、概念範疇に対

11) すでに触れたように (前出脚注3)、「ベツィミサラカ」という名称の語義は、「数多く (be), 分裂することなし (tsy misaraka)」である。マダガスカル中央高地南部の「ベツィレオ (Betsileo)」や、東南海岸部の民族全般を指示する他称である「ベツィレバカ (Betsirebaka)」は、それぞれ「数多く (be), 破れることなし (tsy leo)」、「数多く (be), 疲弊することなし (tsy rebaka)」をその語義とする。この点からすると、ここでの「ベツィミハナカ」という造語は、「数多く (be), 拡散することなし (tsy mihanaka)」を意味することとなり、マダガスカル語の民族名称としてとりあえず有意義であることにはなる。

12) 「そもそも一つ概念を把握していなければ、その概念にかかわる境界事例を境界事例として認めることすら不可能である」[サール 1986: 13]。

する新たな理解の枠組みの開示だったのである。

### 謝 辞

マダガスカルでの調査は、国際文化教育交流財団の奨学金によって可能となった。記して感謝する。また、草稿に対して貴重なコメントをいただいた方々に感謝する。

### 参 考 文 献

- Abinal, le R. P.; and Malzac, le R. P. 1963. *Dictionnaire Malgache-Français*. Paris: Editions Maritimes et d'Outre-Mer.
- Association des Géographes de Madagascar. 1969-1971. *Atlas de Madagascar*. Tananarive: Bureau pour le Développement de la Production Agricole.
- Grandidier, A.; and Grandidier, G., eds. 1958. *Histoire physique, naturelle et politique de Madagascar. Vol. 5: Histoire politique et coloniale. Tome 3: Histoire des populations autres que les Merina. Fascicule 1*. Tananarive: Imprimerie Officielle.
- 板垣雄三. 1992. 『石の叫びに耳を澄ます——中東和平の探索』東京: 平凡社.
- 前田成文. 1989. 「ベフディ——ベツィミサラカ族とシハナカ族の狭間で」『東南アジア研究』26(4): 417-429.
- Maeda, Narifumi; and Rabarijoelina, Armand. 1988. Vandrozana: A Sihanaka Village in the Southeastern Region of Lake Alaotra. In *Madagascar: Perspectives from the Malay World*, edited by Y. Takaya, pp. 165-224. Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- 森山 工. 1992. 「民族の場所——中央マダガスカル北東部, シハナカ族における民族意識」『民族学研究』57(2): 121-148.
- 名和克郎. 1992. 「民族論の発展のために——民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』57(3): 297-317.
- Rajemisa-Raolison, Régis. 1985. *Rakibolana malagasy*. Fianarantsoa: Ambozontany.
- Ramiandrasoa, F. 1975. *Atlas historique du peuplement de Madagascar/Tantara ara-tsary ny fiforonan'ny mponin'i Madagasikara sy ny fivoarany*. Antananarivo: Université de Madagascar, Académie Malgache and C. N. R. de Tsimbazaza.
- Richardson, Rev. J. 1885. *A New Malagasy-English Dictionary*. Antananarivo: London Missionary Society.
- サール, J. R. 1986. 『言語行為——言語哲学への試論』坂本百大; 土屋 俊 (訳). 東京: 勁草書房. (原著 Searle, J. R. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. 1969. Cambridge: Cambridge University Press.)